

## ◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

— 特集陳列「皇室ゆかりの名宝」 —

きぞく かざ  
 貴族のきものを飾るデザイン  
 ゆうぞくもんよう  
 — 有職文様の世界 —

みなさんが服を選ぶとき、気にしているポイントはどこでしょう？スタイル良く見える形？それとも色？柄という人もいるのではないのでしょうか。今回は、この柄、つまり衣服の文様のうち、日本の貴族が用いてきた有職文様について考えてみたいと思います。

百人一首の札でもおなじみの、日本の貴族の格好〔写真1〕。現代の和服とは違って、袖が長く、袖口も大きく開いています。日本の民族衣裳といえば和服なのに、おかしいなどと思う人もいるのではないのでしょうか。実は、和服はこのような衣服の下着であった小袖から発達したものです。



写真1 《小葵文様小直衣 仁孝天皇より拝領 有栖川宮幟仁親王着用》京都国立博物館蔵

さらにじっくり文様を見ていきます。和服のように花や鳥が絵画的に描かれているのではなく、繰り返しの文様です。これは、現代の和服が、織り上がった生地の上に染めや刺繍で文様をあらわしているのに対して、公家装束つまり貴族が用いてきた衣服では、

最初から文様が織り出された織文様の生地を用いるからです。織機という、当時でいえばコンピューターに匹敵するほど最先端の機械を用いてしか製作できない織物は、貴族しか着用できない高級品でした。

この公家装束は、奈良時代に中国から学んだ衣服の制度をもとに、平安時代に完成したもので、主に宮廷に出勤する時に着る服でした。そのため、着用する人の位や立場によって、色や柄が定められていました。宮廷では好きなものを自由に着ることはできなかったのです。ここではそのうち、天皇が身に着けた二種類の文様を紹介しましょう。



図1 桐竹鳳凰文様

ひとつ目は、天皇が着用する袍という衣服にしか用いることが許されなかった、桐竹鳳凰文様(図1)。間隔を空けて配置する散らし文様です。長方形にまとめられたこの文様は、花咲く桐と竹を中心に、空には飛び交う鳳凰を、地には向かい合う麒麟を配したものです。鳳凰も麒麟も、中国の伝説にあらわれる世の中に平安をもたらす動物で、鳳凰は桐の木に宿り竹の実を食べるとされています。世の中が正しく治まっている時にあらわれる鳳凰や麒麟は、王者を示す特別な文様でした。もちろん、桐に鳳凰という組み合わせは、格調高い文様として庶民の衣服にも取り入れられていますが、この長方形にまとめられた文様は、天皇にしか許されない特別なものでした。

ふたつ目は小葵文様(図2)。天皇だけが用いた文様ではありませんが、天皇が着用する御引直衣という衣服に用いられました。こちらは繰り返すことによって全体をおおう文様です。四枚の葉で構成されたひし形の中央に花を置いた文様ですが、中央の花をゼニアオイの花と見立て、小葵という名前が付けられたといえます。



図2 小葵文様

このほかにも、立涌文、丸文、菱文、亀甲文、窠文など、公家装束には特有の文様が用いられてきました。これらをまとめて有職文様と称しています。それぞれの文様に名前が付けられ、時にはそこに意味が隠されているなんて、文様ひとつとっても伝統文化は奥深いですね。

(工芸室 山川 暁)